

たちが上陸してきた。

掃除の済んだ工場の中で、機械類の試運転の音がリズムミカルに響き出した頃、村長
 コスイギンは、漸く薄氷の解けたネルビーチ湖を背景にして、彼としては精一杯氣取
 つた格好で、寫真機のカメラにおさまつてゐた。

「有難う。寫真できたら、上げますよ」

天使のやうな微笑とともにシャッターを切つたその男は、去年、一罐のアルコール
 にコスイギンの相好を崩したあの金髪ブロンドの美青年に相違なかつた。

アルフレッド・E・デンビイ。それが彼の名であつた。その革上衣レザーの下の華美な格
 子縞ツカの胴着チョッキが證明するやうに、彼は英國人であつた。そして、國籍の上では露西亞人
 であつた。

明治二十三年——西曆千八百九十年の秋、當時百戸ばかりの露人の寒村だつた樺太
 島のマウーカサガレン（現在の眞岡）へ、少年の手をひいて漂然と現はれた一人のスコットラ

ンド人がゐた。その名をリチャード・デンビイといひ、元の職業は貨物船の船長だつ
 た。老齡のため下船したと言ふ彼を、同じ舊教徒としての同情から雇入れたセミヨ
 ノフといふ昆布商人は、聽て、この老船長の疎腕が、己れの店を根こそぎ横奪りして
 しまふとは知らなかつた。

リチャード・デンビイは、彼がセミヨノフ昆布店の事実上の主人となつた頃、如
 才なく露西亞帝國臣民に歸化の手續をとつた。そして、漸く稼ぎ蓄めた金ルビナを資本にア
 イヌ人を漁夫とする樺太沿岸の鮭漁業へ乗り出したのである。

アルフレッド・デンビイが、即ちこの老デンビイの一粒種であつた。

運命の星は皮肉にも、後年の好敵手堤清六の出生と同年——西曆千八百八十年（明
 治十三年）に、彼アルフレッドを印度洋上の一貨物船の上で出生せしめたのである。

アルフレッドが、典型的なスコットランド人の骨格を備へて成長した頃、父リチャ
 ードはもう一かどの漁業家であつた。その觸手は、既にカムチャツカまでに伸びてゐ

た。セミヨーノフの店先で、彼が老衰のため、折れるやうに死んで行つた頃、小デンビイは、父の遺志を繼ぐに充分な、肉體と體驗と資本とを享有してゐたのである。

日露戦役のはじまる直前、アルフレッド・デンビイは三ヶ所の漁區をカムチャツカに獲得してゐた。そして日露戦役の結果、樺太南半が日本の領土となるや、彼デンビイは、マウーカ（眞岡）附近に持つてゐた十數ヶ所の漁區を、邦貨九十萬圓で日本政府へ賣却することに成功した。

九十萬圓——この金貨を白い手に握つて、アルフレッド・デンビイは何を考へたか？ 彼の眼前には、毎日のやうに白人の食卓を飾る罐詰鮭の紅い切身が、父の貨物船の船艙を埋めてゐた鮭罐詰の四打函が、そして、壁に貼つたカムチャツカ地圖に青い横線を這はせてゐるカムチャツカ河が、髣髴としてうかび上つたのであつた。

日露漁業條約の第一條によつて、日本人漁業家は、「河川及^{イシレット}ビ入江」から法規的に締め出されたのである。その間隙——即ち最も鮭の漁獲に好都合な河川こそ、われわ

れ露西亞人（英國人）の乗すべき絶好の場所だとデンビイは信じた。彼の脚は、浦鹽へ、函館へ、東京へ、頻繁に動き出した。——堤清六が、北越の雪の中で罐詰工場の設計圖を描いてゐる頃、デンビイの九十萬圓の資本の一部は、ある目的のために、既に有効に利用されてゐた。

カムチャツカ河々畔、ネルビーチ漁區の獲得。罐詰製造機械の輸入、空罐原料、そして多量な英國鹽の購入、それらの計畫が着々と實現されると、デンビイは、^{タイムイズマシー}時は金なりの鐵則にのつとつて、一刻の躊躇もなく、明治四十二年の秋、既に冬海の形相を備へた北太平洋を乗り越へ、黒い帆の三檣船をカムチャツカ河の河口へ滑り込ませたのであつた。

相談役であり、老練な漁業實際者である露人クルマレンコ。諾威人の技師長サーゲン。——この二人を最大の協力者として、デンビイの城砦はがっちり固められた。鮭罐五千函。

これが、デンビイ工場初年度の生産目標であつた。

川面はまだ氷片を浮かべ、雪どけ水が、黄色く泡を立てて奔流してゐたが、はちきれさうな腹に堪へ切れなくなつた鮭の一群が、堤清六の命名した海豹岬トツカリの鼻を廻つてそつと川水の中へ忍び込んできた。

第一期漁——「雪ばしり」の來游である。

デンビイ工場の大規模な刺網は、既に、原住民の既得權を黙殺するやうに、河心へダンと太い線を張りめぐらしてゐた。

カムチャダールが、三十分もかかつて、手網に一つの鮭を掬ひあげる前に、デンビイの刺網には、もう網の目が見えなくなるほど、鮭の一族が頭をつつこんでゐた。

河岸甲板デッキへひきあげられる片つ端から、支那人の奴隷のやうな雑夫が、青龍刀のやうな長い刃物をひらめかして頭を切り、内臓をひき出した。

諸威直輸入の、自動機械オートマチックが、機械油マシンをたつぷり含んで待ち構へてゐた。頭を截られ

た鮭がその機械の一端に截せられると、もう數時間の後には、ピカピカとニスの艶も鮮やかな一ポンド入の堅罐かたくわんとなつて、商品價值を高らかに誇りながら生れでてくるのである。

勿論、それは、現代の、一分間に八十罐を標準生産能率とする最新式の製造機械に較べれば、博物館的な舊式なものに違ひない。しかし尠くとも、明治四十三年のその時代には、米國コロンビア河畔の罐詰工場に備へつけられたブリス式製造機械と拮抗する、世界的な優良自動機械オートマチックであつたのである。

風雲児デンビイの出現を祝福するやうに、今年は、第一期漁から好調であつた。

技師も労働者も、新鮮な河漁の魅力に、疲労を忘れて働きつづけた。

事務所の壁に掲げられた圖表グラフには、毎日の漁獲高と、罐詰の出來高が、二本の線に圖示されて、争ふやうにグングン背伸びをして行つた。

デンビイは、その若さと精力の捌け口を何所へ見出してゐるのかと人々に疑はれる

ほど、毎日端然と事務机の前に坐り、毎朝丁寧に剃る鬚の揉毛のあたりを撫で廻してゐた。そして、出来高が五十函になる度に、倉庫からシャンペンを搬ばせ、ボンボンと景氣のいい音で栓を抜かせた。

或る日のこと、漁場廻りをしてゐた技師長のサーゲンが、自轉車のペダルを狂ふほど踏みつけて、事務所へ駆けつけてきた。興奮の色は、彼の北歐人らしい彫の深い鼻面にかくれて見えなかつたが、細長い指先がかすかに顫えてゐた。

デンビイの勧めた土耳其煙草を、彼は大袈裟に謝絶して、低い聲で、

「日本人です」

と言つた。そして慌てて、

「日本船です」

と言ひ直した。

同席してゐたクルマレンコが、僅かに椅子から腰を持ち上げたが、デンビイの澄み

切つた眸には霧一つささなかつた。

「もう来る頃だと思つた。少し遅かつたな」

といふ意味のことを言ひ、すぐ話頭を轉じて、今日の工場の成績などを訊ねた。

「順調です。しかし、日本船がウス・カムに入港しました。三隻です」

「それと、工場の作業能率とどういふ関係があるかね？」

「大有りです。日本でも漸く罐詰事業の必要に目覺めて、今年このウス・カムへ工場を建てるといふことは、貴方が東京から得てきた情報ではありませんか。その船が來たのです」

「その船？ 清六・堤の船、と訂正しなさい」

デンビイは、靜かに揉毛を撫でてゐる。

その頃——お馴染のウス・カムの岸に錨を卸した寶壽丸、喜多丸、住榮丸の三隻から、希望と期待に胸を高鳴らせた人々が、續々と上陸を開始してゐた。

カムチャツカ河四露里（一里）の上流に、三本の真黒い煙突が威歴的に聳え立つてゐることは、清六も平塚も、それを見ないうちから——函館の領事館で査證を受けるときから知つてゐたのである。そのときは驚いた。しかしその驚きは忽ち——岩礁をみつめて奔騰する怒濤のやうに、逞ましい闘争心へ變つて行つたのである。

（英人、何するものぞ！）

清六は、フレップの咲きはじめた海岸の濡れ砂の上へ、どつしりと長靴の足を踏みおろした。

三

日本の罐詰を世界に押し出せ!!!

カムチャツカに於ける日本最初の罐詰工場を、真先きに形作つたものは、棟木でも土臺石でもなかつた。この標語スローガンであつた。それが、達筆家の高橋榮吉に依つて、荒削

りの四分板へ筆太に書かれ、徳川時代の高札のやうにカムチャツカ河の河岸に打ち立てられた。

六月中旬。既に鮭漁は第一期が終りかけてゐた。資材、人員の調達に暇取り、豫定より約一ヶ月遅れてこの現場へ到着した人々は、そのハンディキャップを超人的な努力で取り戻すより方法がなかつた。

まづ罐詰工場を建てねばならない。

242號と243號（この二つの優良漁區に對して、清六は、今年から三ヶ年間の長期營業權を落札獲得してゐた）の海面へ、建網たこあみを据えなければならぬ。

罐詰の外に、内地市場用として例年通り「鹽引」を製造するために、鹽切り場や、筋子貯藏所を改築しなければならない。

仕事は山積してゐた。能率的にそれらを處理するために、徹底した分業制度が採用され、すべてが競争的な速度で進捗して行つた。

罐詰工場は、清六の豫定通り、海を見下す小高い草原の上に建てられた。外觀は、三年前のあの簡便なツツミ・デパートといくらも違はないやうに見えた。幅三間、奥行八間位の長方形の板圍ひであつた。板屋根の上から、一本の長さ十尺足らずの黒い煙突がちよこんと伸びた。遠くから見ると、それは折れ残りの線香のやうに、少し河の方を向いて傾いてゐた。

内部に据えられた機械は、一個の直下式蒸釜レトヤトであつた。それは、五右エ門風呂を少し機械らしくしたやうな無體裁な代物であつた。罐詰をこの中に入れて沸騰させ、罐内の空気を抜くのが、この五右エ門風呂の役目だとは、そのときになるまで漁夫たちには想像もつかなかつた。

罐詰工場と隣接して建てられたもう一棟の板小屋は、空罐工場と呼ばれた。この工場の中には、厚いのもや、薄いのもや、大小とりどりの鐵板の束が、雑然と置かれてあつた。それは同じ空罐材料でも、デンビイ工場のキッチンと名刺のやうに規格の揃つた鐵

板とは、比較にもならぬ粗末さだつた。

凍原フンドラの上が、しだいに色づいてきた

いつ見ても、それは鮮やかな季節の移り變りであつた。

清六たちにとつて見馴れた遠山の山巒が、今年も挨拶をするやうに雪の外套を脱ぎ棄てはじめた。

クルチューフスカヤの噴煙が、晴れた大空へ棒のやうに直立する日もきた。

鷗オウが、魚群を索めて、遠い南の空から旅してきた。ガオガオと赤兒のやうな啼き聲が、寢不足な漁夫や雜夫たちの神経をいら立てた。

漁期は、第二期へ移らうとして、勿體らしく足踏みをしてゐるところであつた。

その前觸れのやうな薄い魚群が、ちよろちよるとカムチャツカ河を遡行しはじめたが、沖合數百間の規定の建場へ据えられてゐる堤商有の網には、まだ鱗一枚かからなかつた。

言ふまでもなく、漁業條約の實施以來、日本人は、河川では一尾の魚を獲ることも許されなかつた。それどころか、河川へは理由の如何を問はず、小舟一艘乗り入れることができなくなつてゐた。

河へ遡つた魚は、カムチャダールの手網に掬はれ、デンビー工場の刺網を肥やした。一里上流の空から、黒い煙突の煙が、朝夕の霧と混つて、ウス・カムの村へ流れてきた。

「毛唐の煙は臭いてヤ……」

漁夫たちは、わざと大袈裟に鼻をつまんだ。そして、河の中をキラキラ光つて遡つて行く魚に向つて、おいでおいでの手付きをした。

去年あたりから、頻繁にこの漁區にも現はれてきた露西亞政府の漁業監察官が、革靴をキユツキユツと鳴らし、肩にかけた威赫的な銃身を陽にきらめかしながら、今年も凍原の上を歩いてきた。堤商會の事務所へ小一時間も坐り込んで、帳簿の數字を根

こそぎ訊ねたり、漁夫の一人々に鋭い眼光を送つたり、河を見卸す丘の上のグイ松の蔭に、そつとかくれてゐたりするのであつた。

しかし——時は遂に來た。

攝氏十度に上昇した海面は、もう我慢ができなくなつたやうに泡立ちはじめた。明治四十年の、あの歴史的な初漁のときと同様、海の水は銀色に變つた。

243號の建場で、約半月、海と睨めつこをしてゐた船頭は、腹の底からしぼり出すやうな聲で「木遣り」をかけた。

ヤートコセエ ヨーヤサア

この網起せば

千兩萬兩の金ぢやもの

アラヤ ドツコイ

ヨイトコ ヨイトコナ

漁夫たちは合唱した。起し船の舷縁を踏んまへ、両手の指を網の目にかけて手繰り起しながら、合唱した。素朴な、哀調を帯びた、この伝統的な木遣り音頭は、まるで日本の海にひびくが如く、朔北の涯もない海面に傳はりひろがつて行くのであつた。夥しい飛沫の氾濫であつた。

その白い沸騰の中から、鮭の青黒い頭が、銀色の背が、鱗が、あばれ狂つた。

漁夫たちは、すると、その狂亂が乗り移つたやうに興奮し、殺氣立つてくるのであつた。齒が食ひしばられ、汗が眞夏のやうに、ダラダラと赤銅色の皮膚をしたたり流れた。苦痛を感じる餘裕のない緊張した瞬間がつづいた。網は一寸刻みに、杵船の方へ縮められて行き、網に乗つた魚の群は、徐々に濃い團まりとなつて、漁夫たちの足許へせりあがつてくる。もはや魚は水面から離れたやうに見える。漁夫たちを襲撃するやうに、高く跳躍するものもある。

第二期漁の走り——新鮮な、北海の親潮がそのまま凝縮して形を成したやうな鮭が

大事さうに傳馬船で陸へ漕ぎ運ばれてきた。

それは直ぐ、莖園ひの事務所に運ばれ、祖國を象徴するやうにこの堀立小屋の片隅にしつらへられた小やかな神棚へ供へられた。これは毎年の例であつた。今年も清六は、この神棚の下に立ち、最初の海の幸をさづけ給ふた神様に感謝の禮拜をするのであつた。その時の清六は、「豪儀な俄か成金」でもなく、北越一の漁業家でもなかつた。少年時代、振武館の寒稽古で、大野道場の神棚へ拜禮したときと同様、單純で素直な堤清六にかへつてゐた。

花の東京から、今年初めて漁場へ——しかも飛び切り原始的なこのカムチャツカの漁場へ連れられてきた水産講習所の人々——鍋島熊道、菅宮清吉、海老澤光治の面々も、もはやクルチーフスカヤの山容や、嚙む刺す蚊の猛烈さや、堤清六の熱心さに驚いてばかりはゐられなくなつた。愈々、技術者としての彼等の腕を見せるときがきたのだ。

平塚の嘗ての同僚——福本萬作とそっくりな顔をした菅宮清吉は、禿げ上つた額に汗を光らせながら、空罐工場で働きはじめた。ブリキ屋に轉業したやうに轟ましい音を立てて、足踏機械で鐵板を切斷すると、それを三本のローラーにかけて圓筒形に仕上げるのである。

海老澤光治は、同じやうな足踏機械で、鐵板を丸く打ち抜いて行つた。これは罐詰の底蓋になるのである。菅宮清吉は、更にハゼ折機を使つて、圓筒形の鐵板を食ひ合せる折目をつくつた。

職工たちは、燒鑊にハンダをじゆうじゆう溶かしながら、菅宮と海老澤の製つた圓筒と圓板を貼り合せて、どうやら空罐らしき物體を製出して行つた。

ここでは蒸氣も電力もディーゼル機關もない。動力はすべて人力である。笑つたり怒鳴つたりすると、途端に力の抜ける足踏機械が最新鋭機である。能率に於てはおそらく、デンビー工場の近代的な設備の十分の一の値打もないことであらう。——だが

ここには家族的な人の和があつた。日本最初の鮭罐詰を作るのだといふ意氣と感激が火のやうに燃えさかつてゐた。それは、故障の多い精巧な自動機械オートマチックより遙かにましであつた。

海岸に設けられた棧橋型の濱デッキでは、傳馬船で運ばれた鮭鱒が、紅鮭だけ撰り分けられてゐた。この指導者は鍋島熊道であつた。雜夫たちは、デンビー工場の支那人よりも遙かに敏捷であつた。小刀マキリがキラキラ光るたびに、紅鮭は頭と鱗を截られ筋子がひき出され、更に鍋島の命令に依つて、照焼にするやうに三枚に下して骨を抜かれた。

「外國の罐詰は、骨ごと丸切りにしますがねえ……」

平塚が、脇から遠慮しいしい聲をかけると、鍋島教官は聊か機嫌を損ねたやうに、その佐久間象山のやうな山羊髯を撫でながら、

「外國は外國！ 儂は日本の罐詰を作るんです！」

と、大きな聲を出した。

一體、魚の鱗詰は液汁が多過ぎる——といふのが鍋島の持論であつた。後にそれは誤りであることが解つたが、當時の彼はその説を遵奉した。三枚に下した魚を籠に乗せて、水分が滴下しきるまで陰干しにさせた。そして、半ば干鮭ユッケのやうにコチコチになつた切身を、菅宮・海老澤の製つた空籠へ、隙間がないほどびつちり詰め込ませた。そこへ少量の鹽が投せられ、圓い蓋が載せられると、この半製品は四打づつ籠に入れられて、例の五右衛門風呂へ運ばれた。

現在の設備なら十分以内で足りる殺菌と排氣が、この直下式蒸釜シトキトでは優は四十分を要した。雑夫たちは、貨物船の火夫かたどに轉業したかたちで、素つ裸になつて焚口へ石炭を抛り込んだ。聽て、釜から取り出された鱗詰は、職工たちが一つ一つハンダ鐵で密封を施し、更に表面へ黄褐色のニスを塗りつけるのであつた。

かうして、堤商會の最初の鱗詰が出来上つて行つた。

あまりにも手工業的な速度だつたが、二十罐、五十罐、百罐……とそれは徐々に積み重つて行つた。どの一罐にも、人々の愛情が籠められてゐた。

「千函は大丈夫ですよ！」

清六が見廻りに来る度に、鍋島教官は、魚汁で眞黒くなつた手を振りながら斷言するのだつた。

一函は四打入である。千函に達するまでには、四萬八千個の鱗詰にハンダ鐵が施され、ニスが塗られねばならない——清六は、しかし黙つて微笑した。委せた以上、干渉がましいことは一言も言はなかつた。

242號・243號の建場に大魚がつづき、鹽切り作業も鱗詰製造も、順調に軌道に乗りはじめた或る日のこと、一人の外人が、ウス・カムの海岸に現はれた。

彼は達磨のやうに肥つた體で、赤いネクタイを結び、寫真機をぶらさげ、パイプをふかしてゐた。彼はしばらく沖合を——243號の素晴らしい漁獲ぶりを見物してゐた

が、聽て、音もなく濱デツキの方へ歩いて行つた。

そこでは、平塚と鍋島が指揮者になり、彼ら自身も小刀^{ナイフ}を揮つて、片付けても片付けても沖から運ばれてくる紅鮭を、大童になつて處理してゐた。近付いてきた外人に注意を拂ふ餘裕もなかつた。また五月蠅い漁業監察官が來たな——くらゐにしか思はなかつた。

三枚に下される紅鮭を、外人はパイプの煙越しに眺めてゐたが、聽て、まづい日本語で一人の雜夫に訊いた。

「この魚、なににする、ありますか？」

雜夫がキョトンと眼を上げると、外人は重ねて言つた。

「この魚、人間、食べません。犬、食べます。犬の食物です」

そして遠くの海岸の、干鮭^{ユツラ}がぶらさがつてゐるカムチャダールの懸棚^{ハツカン}を指さしてみせたのである。

平塚が、かつとして顔を振り向けたとき、外人はもう濱デツキを離れて、ゆつくりと板圍ひの空罐工場の方へ歩き出してゐた。明けつ放しの入口から、製罐作業に熱中してゐる菅宮と海老澤の姿が見えた。外人は、眼にも止らぬ早さで寫真機を覗くと、カチリとシャッターをおろした。

それから數日の後。

ネルビーチ湖畔の、豪壯なデンビー工場^{カントラ}の事務所から、自動機械^{オートマチック}の騒音をかき消すやうな高らかな爆笑がわき起つた。

デンビーの事務机^{デスク}に置かれた一枚のキャビネ型の寫真には、足踏機械^{フットプレス}とローラーにしがみついた二人の日本人の姿が、板圍ひの小屋の中から臍ろげに浮き出して見えてゐたのである。

「レッ！」

赤いネクタイを結んだクルマレンコは、笑ひのとまらないサーゲン技師長を制して

「豫定の千函には無理だべなア」

と、平塚が言ひ、

「やつぱし機械かな？ 機械力つて、馬鹿にや出来んこんだからの」

と、清六が、菅宮や海老澤に氣兼ねするやうな小さな聲で呟いたときだつた。

「御免、下さい」

庭の外で、聴き馴れぬ聲がした。

「誰だ？」

平塚が眼を光らせて、中腰になると、ピカピカ光る雨外套レインコートを着た一人の男が、ギイと板戸をあけてそこに現はれた。

滴の垂れる中折帽の置き場に困るやうに、一瞬そこに立ち竦んでゐたが、やがて思ひ切つたやうに長靴を脱いで疊の上へあがつてきた。

平塚が、いつも漁業監察官と應待するときのやうに、疊上の椅子をすすめ、露西

亞語で歓迎の意志を表示したが、客は、樺太サハレンあたりでも習マコへたらしい流暢な日本語で、

「堤さん、ですね」

と清六に笑みかけた。そして差し出した名刺には、清六にも讀めるゴシック體の活字で、A. E. DENBY と記されてあつた。

平塚がギョツと眼を刺き、唇のあたりをビクリと痙攣させた。

清六は名刺を帳簿の上に置いたまま、ちつと、この意外な訪問者を見上げた。

これが、ネルビーチ湖畔の大工場の主人だとは信じられなかつた。全髪フロンツが綺麗に波打ち、撮んだやうな紅い唇が、含辱み笑ひをうかべてゐた。藝術家のやうな白い指を石油罐利用の火鉢にかざしながら、

「海霧ガス、ひどい。困りますね」

と顔をしかめて見せた。そして思ひ出したやうに、

「堤さん、大漁、たくさん大漁、羨ましいです」と言つた。

「堤さん、私、今日参りました。あなたと、ゆつくり、お話、したいです」

平塚が、ケースを開いて露西亞煙草をすすめると、デンビイは丁重に謝絶の意志を現はした。自分と同じ煙草嫌ひであることが、清六には何か不愉快な気がした。

デンビイが、手提鞆の口を開いて、中から數個の罐詰をとり出した頃、清六は完全に落着きをとり戻してゐた。最初の衝撃から立ち直つて、もとの研究好きな堤清六にかへつてゐた。平塚の視線が、注意を促すやうにチラチラと頬に觸るのを感じながら清六は、デンビイの罐詰を手につつ眺めた。

黄金色のニスが見事に塗られてゐた。指先で叩くと、コトツと軽い音がした。

「あなたの罐詰、見せて下さい」

デンビイは、清六の背後の、雑然とした書類棚の上へ眼を走らせた。そこには見本

のつもりで、三個ばかりの罐詰が、郡司大尉や清吉伯父の寫眞や、カムチャツカ地圖を背景にして並んでゐた。平塚が、それを三つとも手に取つて机の上に置いた。

デンビイの罐詰と同じ、正味一封度入の堅罐だつた。その外觀は、ニスの艶も、ハングの工合も、前者と遜色がなかつた。

「大へん、立派です！」

デンビイは眼を瞠つて、その一つを膝の上へつまみ上げた。そして指先に軽く力を入れると、ペカンと妙な音がして、罐の外側に凹みができた。

「鐵葉、薄いですね……」

さつと顔色の變つた平塚を、デンビイは、わざとらしい心配さうな表情で見下しながら、別の一個を取り上げた。振ると、砂でも詰つてゐるやうな重い音がした。

「これ、鐵葉厚すぎます。切るとき骨折りします。切つてみませうか……」

平塚が、裏手の炊事場から二枚の西洋皿を取つてきたとき、デンビイは携帯用の小

さな罐切りで、二つの罐詰を開罐してゐた。まづ皿の上にあけられたのはデンビイの方であつた。赤い、どろりとした内容が皿の上に擴がつた。旨い匂ひが漂ひ、液汁の海に、丸切りにした紅鮭の切身がうかぶやうに見えた。

堤商會の罐詰は、どさつと音をたてて、皿の上に中味を露出した。液汁は殆どなかつた。干魚のやうな匂ひがした。三枚に下した切身は、纏れ合つたまま煙突のやうに直立してゐるのだつた。

どちらが食欲をそそるか？

どちらが市場に歓迎されるか？

それは、考へるまでもないことであつた。いきなり清六は、デンビイの皿に手をのばすと、切身の一片を口にはふり込んだ。ポリポリと軟かく骨まで噛み崩れる音がした。

「美味しいですか？」

デンビイが、微笑で訊いた。

「美味しいですねえ」

清六も、微笑で答へた。

平塚だけが、苦虫を噛み潰したやうに腕を組んでゐた。氣まづい沈黙が空気を凝固させた。波の音や、漁夫たちのざわめきが、思ひ出したやうに聴えてきた。

「堤さん、私と仲間になりませんか？」

さりげなくデンビイが口を切つた。

「仲間？」

「こんな近くに、二つの工場、要りません。堤さん漁場やる、私、工場やる……」

「共同経営？」

「さうさう、共同です。日英同盟、私たちもお國のやうに、日英同盟、やりませう」
平塚が、疊を蹴るやうに立ち上つた。持前の短氣の虫が爆發したのだ。デンビイの

金髪の揉毛に、噛みつくやうな勢ひで、

「貴様！ 俺たちの工場は獲りに来たなッ。やい！ 獲れるもんなら腕づくでも獲つてみるッ！」

「憤らないで下さい。私、親切です。共同、お嫌ですか、堤さん！」

デンビイは、脚を組み更へながら、猶も不敵な微笑だつた。

「堤さん。あなた、この罐詰、まだまだ、作るつもりですか？」

デンビイは、皿の上に頑強に直立してゐる鮭の切身を指さした。

「歸れ、歸れ、歸つてくれ！」

平塚は、細い眼を吊りあげて叫んだ。

「さうですか……」

デンビイの顔色が變つた。怒りではない、不思議な哀愁の表情で、急にがつくり頭を垂れながら椅子から離れた。

「堤さん、歸ります。大へん大へん失禮しました」

一輯すると、デンビイは雨外套レインコートと手提鞆を抱へて、もう土間の方へ退つてゐた。清六が中折帽を取つて渡した。しかし彼も、後向きになつたデンビイが、白くなるほど唇を噛みしめてゐることには氣づかなかつた。

「左様なら」

素直に出て行つたかと思ふと、すぐにまた板戸の間から顔を出したデンビイだつた。その顔は、また以前と同様、少年のやうな優しい羞恥にあふれてゐた。

「堤さん……」

彼は、言ひ辛さうに、口籠りながら、

「濟みません。私、工場まで、船で、送つて下さいませんか？」

清六と平塚は顔を見合せた。清六の眼の中には、肯定の意志が動いてゐた。霧は依然塗り籠めたやうに深かつたし、夕刻の薄暗さが迫りかけてゐた。四露里の道の難儀

さも思はれないではなかつた。

デンビイの案外なしほらしい退去ぶりに、聊か憐憫の情を起しかけてゐた平塚は、敵城の主を送り届けるといふことに、一種の優越感を覺えたに違ひない。彼は海岸へとび出して行くと、胴羅のやうな聲で二三人の漁夫を呼び集めた。

「傳馬の用意ばしろ！ 御苦勞だが、ネルビーチの三本煙突まで行つてくれ」

傳馬船は、海岸から河口へ廻された。

デンビイは、氣の毒さうに頭を垂れて佇みながら、霧の底からひびいてくる傳馬船の櫓の音を聽いてゐた。

二

夏には珍らしい時化がつづいた。

それが濟むと、海は、考へ込んだやうに沈黙してしまつた。」

漁業監察官の往復が急に杜絶へてきて、あの特徴のある長靴のキユツキユツといふ音が滅多に聽かれなくなつた。

242號も243號も網を揚げてゐた。もうそれまでに網の目が綻びるほど獲つてゐたし、鉛色に變つた海からは、期待がつけなかつた。

寶壽丸や喜多丸や住榮丸は、出來上つた鹽鮭や鹽筋子の積込みに忙しかつた。

カムチャダールはそろそろ冬營の準備だつた。懸棚ハングの干鮭ネッが次々に外されて行つた。ネルビーチの三本煙突からも、煙が薄くなつた。

「やつぱし、五千函製つたとよ！」

その噂が、驚嘆の調子で傳へられた。

鍋島は、菅宮や海老澤と、寢不足で脂のたまつた眼を見合せて齒齧みをした。

紅鮭罐詰五百二十六函。

銀鮭罐詰百七十八函

合計七百四函。

二二四

何べん數へてみても、見本用に開罐した數を合算してみても、この數字しか出て來なかつた。豫定の漸く七割だつた。

しかし清六は、一枚々々鐵板を手で丸めるやうな製罐方法で、よくも三萬四千罐も
の罐詰が出來上つたものと感嘆し、三人の技術者の我武者羅な努力に敬意を拂つてゐた。ただ、彼の頭に——舌先にいつもこびりついてゐるのは、デンビイの罐詰の、とろけるやうな味覺だつた。

そのデンビイからは、あれ以來、忘れたやうに何の沙汰もなかつた。ただ時々、デンビイ工場の傭人らしい外人たちが、三々伍々連れ立つて、河を磯舟で下つてきたり歌を唄ひながら凍原を歩き廻つたりしてゐた。

「デンビイでも暇になつたんだべよ」

漁夫たちは、時化で壞れた罐詰工場の板圍ひを修繕しながら、背丈のひよろ高い彼

等を尻目に見送つては呟いた。

船で積み送るべき物と、陸上へ格納して越年さすべき物との仕譯がきまり、それぞれの整理が迅速に捗つて行つた。切揚げ出發は八月末日ときまつた。漁夫番屋の板壁に記された數字が、一日一日、太い指先でこすり消されて行つた。漁夫たちは誰もがびつくりするほど鮮やかな故郷の夢をみるのであつた。

そのやうな——長閑なうちにも心の急き立つある日のこと、若い漁夫の四五人が傳馬船を仕立てて鷗の卵をとりに出かけた。

建場の網が揚げられてから、凡そ半月あまりも海へ出なかつた漁夫たちは、我が家に歸つたやうないい氣持で櫓を押して行つた。潮風は冷たかつたが、海は晴れて眺望がよかつた。海豹岬の鼻を廻つた北岸には、洲のやうな岩礁がちらばつて居り、鷗はその岩蔭の砂の上に卵を生み落して置くのだつた。

漁夫たちは、童時代にかへつたやうに嬉々として戯れながら、栗色の斑點のついた

二二五

鶏卵の倍もある卵を拾ひあつめた。すると、ふとその一人が、向ふの岩蔭から煙の立ちのぼるのをみつけた。

近づいてみると、そこでは、露西亞人とも諾威人とも英國人ともつかぬ外人が三人焚火を圍んで雑談の最中であつた。みんな油じみた粗末な服装をしてをり、漁夫たちに見覚えのある顔も混つてゐた。

「おい、なんと、温^{あつ}ためて貰ふべや」

漁夫たちは、急に寒さを感じたやうに寄り集まつてきた。最初は遠慮しながらも、にこにこ笑つてゐる外人たちに氣が置けなくなり、言葉の通せぬ「國際親善風景」が展開された。波打際から貝や海膽が採られ、即席の鹽焼料理もできあがつた。

夕刻、鷗の卵を傳馬船に満載してウス・カムの濱へ歸つてきた漁夫たちは、半日の行樂にすつかり満足しきつた顔をしてゐた。

そして廳で、切揚げの日——八月末日がきた。

半歳の氷雪に堪へるやうに、頑丈に板や葦で閉鎖された陸上設備だつた。番屋、事務所、罐詰工場、鹽切り場、濱デツキ——その一つ一つに苦しみや楽しみや、際限のない思ひ出がこびりついてゐた。海霧と、蚊と、白夜と、寂寥に惱まされて、一刻も早く歸りたいと思ふ日がつづいたのに、去るとなればやはり名残りのつきないウス・カムの村だつた。もうここには、日本人の足跡が、あまりにも大きく記されてしまつたのだ。

威勢のいい漁夫の木遣り聲に追はれたのか、直下式蒸釜^{ストート}の吐く濛々たる黒煙におそれをなしたのか、三年前とは比較にならぬほど減つた原住民^{カムヂヤク}の數だつた。今日もデンビイの事務所で、火酒^{ウツカ}の接待にでも預つてゐることであらう、村長コスイギンの鳥のやうな奇聲も聴えてはこなかつた。

歴史的な、罐詰工場第一年に挺身した、八十五名の日本人を分乗させた三隻の帆船は靜かに碇を捲いて、秋立つうねり波を切りはじめた。

クルチューフスカヤばかりが、今年も、峻厳な威容で、この三隻を見送つてゐた。その遙かな麓に、示威的な三本の煙突が小さく見えてゐた。

三

寶壽丸は、九月の末、函館へ寄港した。

喜多丸は、鍋島、菅宮、海老澤たち水産講習所の連中と、七百函の罐詰を乗せて東京へ直航した。

住榮丸だけが、高橋榮吉の指揮下に、鹽鮭を積んで新潟へ急いだ。

寶壽丸函館寄港の目的は、積んできた鮭鱒の賣捌きと、船體の修理であつた。四年間、忠實に堤商會に仕へた寶壽丸は、かなり節々がゆるんでゐた。天狗テウの面も塗りかへる必要があつた。

棧橋前の勝田屋旅館に投宿した清六は、毎日、二階の六號室から、港や波止場や、

街を眺めて暮してゐた。

鮭も鱒も、堤商會の鹽引だといふので、わんさと買ひ手がついて、瞬く間に上相場で賣れてしまつたし、上架した寶壽丸の修繕も順調に進んでゐた。これ以上滞在する必要もなささうなのに、清六は一向みこしをあげやうとはしなかつた。

平塚も、小さな家は鼻がつかへてならんと言ひ、毎日、山の手の實家から勝田屋へ「通勤」してきた。

「どつか手頃な貸家か賣家がないろかの？」

或る朝、番茶を啜りながら、ぼつりと清六が言つた。彼の鼻下にも、對座してゐる平塚の鼻下にも、ウス・カムの名残のやうな髭が生え、ミスメチックのお蔭で、どうやら一ぱしの漁場親方らしい威容を備へてゐた。

「家？ 家は何にする？」

「うん、事務所にしたいと思ふての」

平塚は、はじめて合點が行つたやうに、ふーむと頷いた。

函館に事務所を設けたいといふのは、去年あたりからの清六の懸案であつた。地理的にみても——カムチャツカへの漕敷を計つただけでも、新潟と函館では、問題になるほど後者が優れてゐた。毎年、出漁の査證を受けるために必要な、露西亞領事館も函館に在つた。しかし、それよりも清六を動かしたものは——この函館の街にあふれてゐる新興の氣運であつた。

たしかに植民地らしい荒つぽさはある。北海道本土のやうに、大まかで掴みどころのない人情である。格式張つた虚禮もなく、微くさい因習もない。あるものは北進日本の踏切臺に相應しい健康な港のざわめきである。臥牛山の麓をめぐる天然の良港——水深い巴の港には、四六時中、錨鎖がきしり、起重機がうなり、通船の汽笛が鳴りひびく。波止場を濶歩して行く一人々々にも、熊を相手に一と旗あげさうな、逞ましい面魂がこもつてゐる。

清六にとつては、堪らない函館の街の魅力であつた。着いた日から毎日、波止場から辨天岬までの海岸を歩き廻つて、唐黍焼きのかんばしい季節の匂ひを嗅ぎながら、格好な家を物色してゐたのであつた。——だが、孰れも帯に短かし褌に長しであつた。發展期の函館の海岸通は、漸く芽がでかけた新米漁業家のために、事務所をあけて待つてゐるほど間抜けではなかつた。

勿論、彼に如何に先見の明があるとはいへ、將來——十數年後、この海岸通の仲濱町の一角に、堤商會の後身——日魯漁業株式會社が、瀟洒宏壯な五層建大建築を聳え立たせやうとは、そしてこの函館の街に、「日魯さんならお嫁にやろか」といふ流行語が氾濫して、日魯漁業の黄金時代が現出しやうとは、夢にも考へられないところであつた。

「よし、土地ツ子のおらさ委せて置け！」

平塚は、全權大使のやうに胸をたたいて見せた。思ひ立つと一分間もちつとしてゐ

られないのが彼の癖であつた。尻がもぞもぞするといふ格好で立ち上ると、

「ちよつと二三軒、當つてみてくる」

自信たつぷりな臺詞を残して、階段をどかどか踏み鳴らして出て行つてしまつた。歸つてくるまで長い時間はかからなかつた。

むかし樺太の漁場へ出稼ぎしたことがあるといふ、主人の勝田鑛藏を相手に、呑氣な無駄話を居睡り半分にやつてゐるうちに、どかどかツと再び、階段を踏み鳴らす音がしたのである。

襖があいた。平塚の顔は少し蒼ざめてゐた。

「早よかつたの。收穫ありか？」

清六は坐り直して微笑で迎へた。

「家どころの騒ぎでないてば……」

平塚は崩れるやうに胡座になつて、ふーッと肩で息をした。唇がびくびく顫えてゐ

る。

只ならぬ空気を察して鑛藏が座を外すと、平塚は、番茶の盆を押しつけて顔を寄せた。

「まんまと一杯食はされたぞ、堤！」

「え？ 何が……」

「漁區だ。漁區の沒收だ！ デンビイの仕業だ！」

清六は眼を瞠つた。相手の言葉の意味はよく呑み込めなかつたが、容易ならぬ事態が、霹靂のやうに落ちかかつてきたのは判つた。

「今、海岸通で、領事館のチュヘンコ書記生にはつたり會つたんだ」

「うん、それで？」

「チュヘンコの奴、言ひ居つた。ハバロウスクの國有財政廳から、堤清六宛の指令通牒が函館領事館へ廻つてきたとな」

「指令通牒？」

「それが、漁区の没収命令だ！ 243 號の没収だ！」

「なにッ、243 號？」

さすがに清六の温顔が、ぶちのめされたやうにさッと變つた。

「漁区貸下げ規則第二十條ば楯にとつて……」

「理由は？ 理由はッ？」

「——傳馬船をカムチャッカ河に乗り入れたこと。許可なくして建物を増築したこと。漁区以外の場所で海鳥の卵を採取したこと」

食ひちぎるやうに平塚は言つた。清六は、急所を突き刺されるやうに、一つ一つ頷をひいて頷いた。確かにそれは規則違反かもしれないが、清六の顔は、一時の狼狽から立ち直り、水のやうな静けさをとり戻してゐた。

「デンビイだ！」

結論をつけるやうに、憎悪を籠めて平塚が言ひ切つた。清六も呟いた。

「うん、デンビイだのう……」

傳馬船をカムチャッカ河に乗り入れたこと——それは、あの濃霧の日、デンビイの依頼に應じて、彼を彼の工場まで送り届けてやつたことである。

許可なくして建物を増築したこと——それは、あの時化の後、罐詰工場の破損個所を應急修理したことであらう。増築といふほど大袈裟なものではない。

漁区以外の場所で海鳥の卵を採取したこと——こればかりは抗辯の餘地がないかもしれない。しかし、これ又、悪質な密告者なくしては、ハバロウスクまで知れわたることではないのだ。

清六の脳裏には、ウス・カムの切揚直前、毎日のやうに漁区附近を彷徨してゐた外人たちの姿が、悪魔の翼を持つてうかび上つてきた。思へば、彼等はみなデンビイの廻し者だつたのだ。そしてデンビイと漁場監察官の間には常に「密接な」連絡があつ

たに相違ない。

陥穽——底深く掘られた大きな陥穽が、はじめてその全貌を明らかにしたのだ。その眞暗な底で、生捕りの獣のやうに藻掻いてゐる自分たちの姿なのだ！ だが、清六の面には、その痛憤とは反対な、不思議な微笑がただよつてゐた。

「デンビイか。凄腕だのう、奴も……」

殊に、カムチャツカ河へ傳馬船を乗り入れさせたことは、日本人の親切を巧みに利用したデンビイの謀略であつたのだ。自分の人のよさに、清六は寧ろ滑稽な氣さへした。

「堤！ 貴様、なんだその顔は！ 腹が立たんのか腹が！ おらアハバロウスクへ異議申立ばやる氣だ！」

「無駄なこんだろ」

「男の意地だ。面を張られてそのまま……」

「ひきさがつてゐるこんだ。仕様がないう」

「堤！ 243號が横奪りされるんだぞ！ 243號！ おらたちが、この手で掘り出した寶物みてえな243！ それがみすみすデンビイの野郎に……」

怒りに聲を詰らせる平塚だつた。

243號——それは確かに寶物である。血と汗の滲んだ、かけがへのない寶物である。堤商會の生命線であり、主力艦である。ウス・カムニケ所のうち、その漁獲高の六―七割は、毎年243號から擧げられるのである。

カムチャツカの優良漁場であり、紅鮭の本場である243號！

清六は立ち上つた。ハツとする平塚眼の前で、廊下へ顔を突き出すと女中を呼んだ。

「濟まんがの、洗面器を貸してくれんかの」

運ばれた洗面器へ、清六は鐵瓶の湯を垂らした。そして、床の間の鏡臺に向つた。

「平塚。貴様も髭を剃らんかの？」

「なに？」

「おらアなんだか、偉さうに、鼻の下へこんつら物生やしてんのが恥しうなつてきたでの」

清六は笑つた。ウス・カムの名残——コスメチックで愛育された親方髭が、惜しげもなく剃り落されて行くのである。

鏡の中には、デンビイのあの美しい笑顔が映つてゐるやうな気がした。窓から吹き込む港の潮風が、ヒリヒリと清六の剃り跡にしみるのであつた。

新 天 地

一

翌、明治四十四年が明けた。

門松とべ飾りがとれたばかりの勝田屋旅館の店先に、「堤商會函館事務所」といふ大きな看板がかかつた。

髭を落して、一層若々しくなつた三十二歳の堤清六は、正月の餅が食ひ足りないやうな顔をして新潟から渡つてきた。出迎へたのは、やつぱりこれも髭がとれた三十一歳の平塚常次郎と、去年の暮から夫の實家へひきとられてゐるヨシだつた。

高橋榮吉も増野船長もやつてきた。會計、事務係として新たに漁夫の中から抜擢された筒井、今谷といふ二青年もやつてきた。そして、去年一年の體驗で、すつかり漁師らしい貫録のついた鍋島、菅宮、海老澤の三羽鳥もやつてきた。

二階の海に面した六號、七號の二つの八疊間が、事務所に充てられてゐた。それは主人勝田鑛藏の理解ある好意によるものだつた。六號室は清六の「六」、七號室は祖父清七の「七」に符合するといふので、縁起擔ぎの高橋は喜んだ。しかし、二つの部

屋に九人も人間がゐるといふことは、吐き出す炭酸瓦斯の量だけでも大したものだった。そのためか、寒中だといふのに窓があげ放たれ、外の海岸道を歩いてゐても談論風発の賑やかさが聴えてくるのだった。

北海の労働と、鮭の脂でかち得た健康を誇るやうに、みんな揃つて元氣だつた。カムチャッカを一人で背負つてゐるやうな、遠大な抱負や意見が續出した。その間を縫つて、ときどき、清六の駄洒落がみんなを哄笑させた。

彼等を悲觀させる材料は、いふまでもなく243號の沒收事件だつた。致命的な障害——しかしいくら考へても、惜んでみてもきまのないことだつた。それを忘れやうとするやうにわざと聲高に論じ合つたり、

「カムチャッカの海は廣いぞ。243號がなんだ！」

と虚勢的に肩肘を張つたりするのだつた。

罐詰の話になると、三羽鳥は一膝も二膝も乗り出してきた。前年度の苦心の結晶は、

水産講習所の肝煎りで海軍省へ納入されたり、南洋、支那、濠洲、英國などへ輸出されたのだつた。批評は概して良好だつた。

「——魚の質は非常によろしい。だが製法に研究の餘地がある。鹽と液汁が缺乏してゐる。肉は三枚に下さず、骨つきのまま丸切りすること。これらの點を改良すれば、品質は米國製品に遜色がない」

これが代表的な批評だつた。鍋島までが、三枚に下させたのは誰だとはかり丸切説を主張した。清六に自信を與へたのは、魚の質が優秀といふ點であつた。嘗ての、伊谷教官の言葉通り、北洋の鮭の優秀さが内外に認められたわけであつた。製罐機械も清六の投資に依つて、デンビイ工場の自動機械オートマチックには及ばないとはいへ、前年よりは遙かに能率的なものが用意されてゐた。

一月中旬になると、清六と平塚は、打連れて浦鹽斯德へでかけて行つた。用件は勿論、毎年行はれる漁區の入札に参加することであつた。二月中旬、毛皮の外套の襟に

深々と顎をうづめて歸つてきた二人の顔色をみて、堤商會の人々は、一縷の望みが完全に失はれたことを知った。

「243號はどげしたね？」

高橋が、諦めきれないやうに訊くと、清六は言下に、

「駄目さ。デンビイに奪られたこんだ」

と苦笑まじりに答へた。

今更ながらアルフレッド・デンビイの厚顔卑劣な挑戦を知つたやうに、痛罵非難の聲がごうごうと一座に湧きあがるのだった。

堤商會が落札した漁區は、前年から繼續のウス・カム242號の外に、西海岸オゼルナヤの232號であつた。

「えッ、西海岸へ進出するのかね！」

高橋も鍋島も、吃驚した聲を擧げた。清六と平塚の切角のお土産に對して、人々は

口に合ない料理を押しつけられたやうに、有難迷惑な顔を見合すのだった。

「西海岸は東海岸に較べて、問題にならんさうぢやないかね」

「天候も悪いし、寒氣もひどい。ろくな魚も寄らんとかいふ噂だ」

人々は話し合ひながら、オホーツク海の荒波に削り取られたやうな、平板なカムチヤッカ西海岸の海岸線を頭にうかべるのだった。それは地圖で見ただけでも、豊饒な太平洋に洗はれてゐる東海岸とは、段違ひに荒涼とした自然を思はせるのだった。

「オゼルナヤを知らんのか。郡司大尉の發見された優秀漁場だぞ。ウス・カムに劣らん紅鮭の本場だこて！」

人々は、初めて合點が行つたやうに清六の言葉を聞いた。オゼルナヤ——それはたしかに郡司大尉の發見した漁場である。だが、發見したといふだけで、百石の紅鮭を獲つたといふ噂も聽かないではないか。いはばそれは未知數なのだ。お題目だけなのだ。

郡司大尉に私淑するあまり、主人は、無條件でオゼルナヤを落札してきたのではあるまいか？ 人々には、それが、243号の代償漁場として役立つとは思へなかつた。それが、デンビイに對する復讐の武器となるとは思へなかつた。彼等にしてみれば、寧ろ、清六が、ウス・カムに隣接した地區の安全さうな漁場を落札してきてくれることを期待してゐたのであつた。

堤商會の人々には、蔭口をきくやうな小ざかしい會社員根性はなかつた。高橋も増野も鍋島も筒井も、腹藏なくオゼルナヤの不安を力説し、清六の反省を促すやうな口振りさへ洩らした。

清六は、相變らずの微笑をそれらの言葉に酬ゆるだけであつた。

珍らしく、平塚も寡黙であつた。悲壯な決意を抱いてゐるに違ひなかつた。清六と額を合せて仕事か相談をつづけた。二人の花梨の机には、罐詰工場の設計圖が置かれたり、建網たこみの見取圖が載せられたりした。港の宵のさんざめきを尻目に、深更ま

で話聲がつづくこともあつた。

人々に反省の時期がきた。いつしか鍋島と菅宮が、清六と平塚の相談に参加してゐた。堤商會の問題が討議されてゐるに相違なかつた。

——今年は東海岸ウス・カムと、西海岸オゼルナヤに罐詰工場を併營する。兩工場とも罐詰三千函を製造する。

この方針が決定されたとき、堤商會の人々は誰一人不安らしい顔を見せなかつた。

「當つて碎けるだ！」

それが合言葉になつた。

漁具、漁網、燃料、食料の購入。鹽と空罐材料の調達。仲積船（運搬船）の備船契約。領事館との交渉。東北地方からの漁夫の募集——人々は、勝田屋旅館の十六疊の事務所を根據にして、千手觀音のやうに働きたした。

雪の皚い函館では、もう下町の街路が七分通り乾いて、太平洋から吹く強い南東風

が、馬糞を捲いて辻々を暴れ廻る三月下旬のある日——堤商會の事務所では、一つの緊張した光景が展開されてゐた。

平塚、増野、菅宮、筒井の四人が、旅装を整へて清六の前に坐つてゐた。机には白布がかけられ、冷酒の罎と、鯛の束と、勝栗の皿が置かれてあつた。

「——これがヤウイナ河だ。これから一里と十町ばかり北にもう一つ小川がある。その川口の南に、十七丈の崖が突き出とるさうだ。その端から崖つづきになつてゐてねここに寶壽丸の入れそうな小さな澗がある。これがオゼルナヤださうだ。暗礁の多い場所らしいから、船長、氣をつけての」

清六は、疊にひろげた海圖を、こすりつけるやうに指さして説明した。増野船長は太い眉を伏せて無言で頷いてゐた。

「平塚、たのんだぞ。おらも、東海岸から視察に廻つて行くつもりだがの……」

清六は、小し聲を顫はせて言つた。

「大丈夫だ。どんな荒濱でも驚かんで。貴様の來る頃にや、函館のやうな自動車の走る街にして置いてやるさ、はつははは」

豪快に肩を聳やかしながら平塚が言つた。しかし、その笑聲はなせがわざとらしく人々の耳にひびいた。

「では乾杯だ……」

清六が、正宗の二合罎をとりあげた。

鍋島、海考澤、高橋、今谷の四人にも盃が廻つた。珍らしく清六も、ぐつと一口にあほつた。

窓から見える港の一隅には、出帆準備を整へた寶壽丸が、塗裝の鮮やかな黒光りする船體を横たへてゐた。

その日の夕刻——早春の埃つばい陽の光が大森の濱へ沈んで行く頃、靜かに錨を捲いた寶壽丸は、巴の港を斜めに横切つて、津輕海峡の荒潮の中へ音もなく進み出て行

つた。

白い帆を海鳥の翼のやうに張つたその小さな姿を、波止場で見送る清六たちの外に知つてゐた者があつたであらうか？ たとへ知つてゐたとしても、その人は、まさかこの百六十三噸の帆船が、カムチャッカの無人境を目指してゐやうとは想像だにしないかつたことであらう。

北洋への出漁は、例年函館出帆が、五月下旬か六月上旬であつた。——その常識を遙かに打ち破つて、平塚たち寶壽丸の人々は、劃期的な三月下旬の出漁を敢てしたのである。

前途の苦難を豫報するやうに、津輕海峡の三角波は、まだ冬の名残りをとどめて、猛々しく寶壽丸の舷側へうちかかつてきた。

二

硝子で築き上げたやうな、青光りのする氷の壁が、視野の限り連なつてゐた。

山は、何かに押しまくられたやうに、海へせり出してゐた。聳え立つたり、急角度で傾斜したり、削り取られたりした崖が、争ふやうに海へ爪をのばして、濤を噛み砕いてゐた。その爪と爪との間に雪がたまり、風が吹くと、金屬片のやうにキラキラ光つて空へ舞ひ上つた。渚といふものがなく、崖裾からすぐ海につづいてゐるやうに見えた。

凄壯な、四月半ばの西海岸の風景だつた。季節の差もあるが、平板で荒涼とした東海岸の景色は、これに較べると、まるで女性的な優しさだつた。

寶壽丸は、ヤウイナ河の河口近くで帆を下した。目指すオゼルナヤはまだ一里半ばかり北方だつたが、鋸のやうな岬や、白い泡を立ててゐる暗礁が、あまりにも危険に見えた。

「陸連ひに行くことにするべ！」

それが可能かどうか判らなかつたが、平塚はそう決断を下した。増野船長は、ほつとしたやうに投錨の合圖をした。その錨が、辛じて届いたほどの深さだつた。

平塚、菅宮、筒井と、漁夫雑夫の半數二十五名が上陸した。みんな草鞋ばきだつた。差し當り必要な米、味噌、木炭や、天幕などを各々の肩に背負つて、北に向けて一列に歩き出した。足場はゴロタ石の狭い渚だつた。磯波が刎ね上つてそのまま氷になつてゐた。

「氣イつけれ！ 無理すんなや！」

平塚は、叫び叫び先頭に立つてゐた。冷たさと痛さで、爪先から感覺のなくなつてくる足であつた。風は沖から吹きつけたり、岩角から切れ込んで、一行の頭上に針のやうな雪を撒きちらしたりした。みんな齒を喰ひしばつてゐた。二十日あまりの航海の疲労で、くたくたになつてゐる體だつた。なせこんな苦しみをしなければならぬのかと考へたり、その考へを打ち消したりしながら歩いた。

一里近くも進んだかと思ふ頃、平塚が、荷物を地べたへ叩きつけて立ち止つた。

幅十間ばかりの川が、氷に所々閉されながらも、雪どけ水の渦を巻いて海へ吐き出してゐた、思ひがけぬ障害だつた。川は、人間どもの愚かな努力を嘲笑つてゐるやうに見えた。

「駄目だ。引返さう」

菅宮が、絶望的な眼差しを沖合の寶壽丸に投げかけたとき、筒井が前へ出てきた。「よし、俺が渡つてみせる！」

漁夫から幹部に抜擢された知遇に感じてゐる彼であつた。言下に、川水へ草鞋を浸した。米俵を背負つた彼の姿が、中流まで進んで行つたとき、人々は、川が案外浅いを知つた。こんどは争ふやうに、我先に川を渡りはじめた。——一ヶ所、流れが淀んで渦を巻いてゐる所があつた。

「おい、そこは深いぞ！」

平塚が振り返つて注意を與へたときには、もう、一人の若い漁夫が、あッ、と聲をあげて足を踏み入れてゐた。飛沫をあげて横轉した體が、背にしてゐた味噌樽とともに、他愛なく押し流されてゐた。

平塚は、肩から炭俵を振り落とすと、殆ど無意識に流れへとび込んでゐた。冷たい水を二三杯飲んだ。額や手足を氷片に引つ搔かれるのを感じた。氣がついたときには、彼は、若い漁夫の胸倉を掴んで、引き据えるやうに淺瀬の上に立つてゐた。炭俵と味噌樽がもつれ合ふやうに海へ流れ出てゐた。

そこからまた暫く渚づたひに進んだ。清六の言つた六七丈の斷崖が、眼前に、偉偉な姿を聳え立たせてゐた。そこら一帯の海岸が、弓なりの彎曲を示し、防波堤のやうに暗礁の列が沖へ張り出してゐた。

「オゼルナヤだ！」

平塚は、感慨を籠めて呟いた。

どさりとどさりと、漁夫たちは荷物を足下のゴロタ石に投げ下した。みんな半身不隨になつたやうに動きがとれなくなり、突つ立つたまま、不安な眼つきで空や海を見廻した。

(ここがオゼルナヤか。……だがその證據はどこにあるのだらう?)

ここでも平地といふものはなかつた。あるものは、海へ馳け出しさうに迫つた崖の列と、その岩の間から渚まで裾をひいてゐる雪の斜面スロップだけであつた。原住民らしい人影もなく、小舎イヌバもなく、犬もゐなかつた。——假にここがオゼルナヤだとしても、果して、こんな海岸へ寄つてくる氣まぐれな鮭がゐるであらうか?

菅宮と筒井は、疑惑の眼を見合せた。だが、平塚は、一刻の時間も惜しいといふ風に、すぶ濡れの衣服から滴を垂らしながら、崖ッぶちを右へ左へ歩き廻つてゐた。見込薄とは感じながらも、罐詰工場を建設すべき敷地を物色してゐるのであつた。

沖から眺めると、雪と氷で一面に張りつめたやうに見えるこの濱邊にも、近づいて

みるとやはり微かな季節の動きが感じられるのだつた。丈餘の積雪にも縦横に龜裂が在り、その下を、ちよろちよろ雪どけ水の流れる音が聴へた。雪の薄い崖の中腹には髪の毛ほどのハイ松の緑が貴重な色彩を點じてゐた。——その崖のてつべんに、ちよつぱり黒く、屋根らしい形のものが見えた。

(小屋だ！)

平塚は、疲勞を忘れたやうに、腹まで埋まる雪を一步々踏みしめて、熊の子のやうに崖の斜面をのぼつて行つた。——郡司大尉が出漁當時建てた漁舎が、たしかにまだ残つてゐる筈だ——清六がいつかさう話したことがある。疑ひもなくそれであつた。獸皮や藁で破損個所をふさいだ、十坪あまりの見窄しい日本風の小屋が、難破船のやうに雪に埋つてそこに横たはつてゐた。

「おーい、小屋だぞ！ 郡司大尉の小屋だぞう」

平塚は、崖下の漁夫たちに怒鳴つた。

そのとき、思ひがけなく小屋の戸がギシギツと内部から開いた。ギョツとして立竝む平塚の眼の前に、獸のやうな黒いものが、奇妙な叫び聲とともに雪の上へ轉げ出てきた。獸ではなかつた。人間だつた。馴鹿らしい毛皮にくるまつて、髭と垢で眞黒な顔に眼ばかり光らして、何か叫びつづけながら、頭をビョコビョコ下げるのだつた。漸く落着きをとり戻した平塚は、相手がカムチャダールの老爺であることを判断しながら、露西亞語で訊いた。

「汝は何者か？」

この老人も、コスイギンの三分の一も流暢ではなかつたが、とにかく露西亞語らしいものを話すことができた。ピリチフといふ名前も、どうやら露西亞の漁業監察官にでもつけて貰つたものらしかつた。瘦せひよろけた馬面に素朴な眞摯な表情をうかべながら、彼が去年息子とともに、黒狐の獵にこの沿岸へ出てきたこと、獵は失敗に終り、息子は大時化のため海へ擡はれたこと、自分は歸るに道なく、この小屋に冬籠り

してゐたこと、などを訥々と話すのだつた。しきりに頭を下げてゐるのは、自分をこのまま小屋に置いて貰ひたいといふ嘆願らしかつた。

菅宮も筒井も、二十五人の漁夫雑夫も、その頃には崖の上へ登つてきてゐた。彼等にとつては、平塚とピリチフの問答よりも、人間の棲める小屋が発見されたといふことが大問題であつた。漁夫たちは、遠慮なしに小屋の中へ入つて行つた。土間の中央に爐の切られた跡があるばかりで、一物も残つてゐない荒れ方であつた。妙な臭氣が鼻をついた。漁夫たちは、小屋の中まで吹き込んでゐる雪を片付けると、炭俵を切つてカンカン火を熾した。そして、一時に疲れが出た形で、鮪のやうに伸びて寝てしまつた。

翌日になると、オホーツク海は綠色に風ぎ渡つてきた。寶壽丸は、ヤウイナ河の河口から錨をあげ、おそろおそろオゼルナヤの淵に近づいてきた。増野船長の細心な操縦によつて、暗礁に觸れることもなく、無事、渚ちかくに投錨した。元氣をとり戻し

た漁夫たちは、掛聲も勇ましく荷役を開始した。木材が、鐵板が、非常な困難を冒して陸揚げされた。濤の音と、海猫の啼き聲しか聴へぬこの北邊の一角に、五十數名の日本人の掛聲が異様な関の聲のやうに、岩壁に反響し海へひろがつて行くのだつた。清六が、一式五千圓を投じて購入した製罐機械も陸揚げされた。

平塚と菅宮との間に、論争が起つた。問題は、製罐工場の敷地であつた。

「もう少し雪が解けるまで待たう。その上で建てるんだ」

これが、菅宮の意見だつた。

「冗談でねえ。五月になれば鮭の走りが来るかもしれねえだど。雪解けなんか待つてゐられるもんか！」

平塚が拳を振つて反對した。

「こんな狭苦しい崖の下へ、どうして工場を建てるつもりだ？」

「構ふこたアねえ。海の中さでもぶツ建てるさ！」

平塚は、不敵に笑つてあとへはひかなかつた。——事實、崖の上では鮭の運搬にも不便だつた。雪解けを待つてゐるのでは、こんなに早く漁場へやつてきた意義がなくなる。去年のやうな泥縄式ではなしに、鮭が来るまでに三千函の空罐をズラリと仕上げて待機してゐなくてはならない。

「さうでもしねえと、デンビイの奴の鼻をあかせねえど！」

罐詰については専門家を以て任じてゐる菅宮も、平塚の火のやうな意氣込みには敵すべくもなかつた。

選定された敷地は、郡司大尉の小屋の真下だつた。満潮時には、崖裾までの奥行が十五間位しかない場所だつた。しかも、カチカチに凍つた堅氷が、渚まで一枚板のやうに敷きつめられてゐた。打ち込む鶴嘴が刎ね返る始末だつた。

「よし！ 本當に海の中さぶツ建てろ！」

平塚は斷乎命令した。干潮時を選んで、波打際へ大きな杭が打ち込まれた。漁夫も

雑夫も、船員も、頭から冷たい潮を浴びて奮闘した。居候を許可されたピリチフまでが、老軀をひつさげて木材運びをやつた。

意地惡な烈風と寒氣と闘ひながら、人々の努力は次第に實を結んで行つた。杭の上に、六尺ほどの高さで床板が張られた。板壁が出来、トタン屋根が蔽はれ、五千圓の機械が据えつけられた。心許ないといふので、板壁の四方には突つかへ棒が張り立てられた。——干潮時には、床下を人間が歩けるほどで、満潮時になると、機械の下にはオホーック海の物凄い濤の音が聴えるといふ、世にも珍奇な工場が落成した。（しかしこの形式は後に北海道の鯨漁場などで多數採用された）

番屋、倉庫、食堂は、崖の上に——先見を誇るやうな郡司大尉の小屋に隣接して建てられた罐詰工場のある崖下から崖上までには、いつの間にか、漁夫たちの頻繁な往復によつて、アスファルトよりも頑丈な電光型（イセツキ）の道が、副産物として出来上つてゐた。

それから二ヶ月の後——六月中旬、清六は高橋榮吉を伴つて、東海岸ウス・カムかなオゼルナヤへ廻航してきた。

二人を乗せた仲積船錦輝丸は帆船ではなかつた。堤商會も、初めて汽船を備船することができたのである。罐詰工場の煙突よりも、立派で好のいい錦輝丸の煙突からは文化を象徴するやう真黒い煙が、濛々と空に吹きなびき海に影を落してゐた。

無聊に苦しんでゐたオゼルナヤの人々は、子供が祭禮の山車を見るやうに、番屋から工場から、先を争つて渚へとび出してきた。そして、三百五十噸の錦輝丸の威容よりも、その檣頭にはためいてゐる赤い縦筋三本の船主旗——堤商會の旗を見て歡呼をあげた。

「親方だ——」

「親方が来たぞ！」

錦輝丸は、寶壽丸より二三丁沖合に碇泊した。艇で上陸した清六と高橋は、忽ち漁夫たちに圍まれてしまった。どの顔も髭髻だらけだつた。涙が光つゐる顔もあつた。彼等をかき分けるやうにして、筒井が出て来た。増野船長が出てきた。菅宮が出てきた。

清六は、意味のない慌ただしい言葉をそれらの人々と交しながら、もう一人の大切な人間を眼でうろろうと捜した。

平塚は、工場の、渚に打ち立てた杭の下に、たつたひとりしよんぼりと坐つてゐた。清六の足音が近づくと、彼はギョツとしたやうに肩を竦めて憔悴した顔をあげた。

「おい、どげした！——どつか悪いのか？」

三ヶ月振りの對面だつた。その懐しさを籠めて、清六の聲は少し弾んでゐた。

「濟まん。會せる顔がないてば……」

平塚は、例の潰れたやうな船員帽を脱いで、伸びた頭髪を神経質に掻き上げた。

「何を言ふてるんぢや、平塚！」

「見てけれ、この閑散ぶりを！ 工場には煙一筋立つとらんし、沖にや木遣聲が聴へるぢやねえし……」

それは、清六が、沖から一眼眺めたとき直感したことであつた。瞬間さすがの清六も、胸が寒くなる思ひであつた。オゼルナヤは、まるで「不漁」といふ假面をかぶつたやうな不吉な形相で遠來の彼を迎へてゐたのであつた。

「それを言ふな。漁は水物、勝負は時の運……てのは貴様の言草だつたらうが！」

「しかし、銀鮭と白鮭と併せて、五百石足らずの漁だぞ。罐詰は、銀鮭ばたつた二百函製つたばかりだ。紅鮭は……肝腎の紅鮭は、まだただの一尾も姿は見せんのだ」

それは、清六にとつても、あまりに意外な報告だつた。岩礁にうちかかつてゐる濤

の音が、急に耳元から遠のいて行く感じだつた。

「おい、堤！ いまは六月中旬、七月がもうぢきやつて来るんだと！」

平塚は立ち上つた。本來の彼にかへつたやうに、顴骨の張つた頬に血がのぼり、眼が燃えてゐた。苛酷な自然を恨むやうな烈しい語氣だつた。吐く息が、このオゼルナヤではまだ白かつた。

「ところで、ウス・カムの成績はどうだ？」

「なじやうも良くないの。まづ中漁程度かの。……おい、立ち話も氣がきかぬ。番屋で一服させてくれ」

二人は、雪の消えた電光型の急坂を踏みしめて番屋のある崖の上へ登つて行つた。「ウス・カムでは、おらの来る日までに鮭鱒混みで千石ばかりだ。紅鮭も少しは獲つたが、罐詰は五百函そこそこだらうの。やつぱし243號を奪られた痛手はでかいのう」

「デンビイはどうしてる？ デンビイの野郎は？」

「243號の地先へ工場を新築しての、じゃんじゃん紅鮭罐詰を製つてて」

「……………」

「平塚、悲觀するなや。今年は一體に氣候が寒い。漁期が遅れてるがんだ。そのうちにどツと一群來、きつとくるこんだ」

「おらアさうは思はん。オゼルナヤは失敗だ。やつばし、ウス・カム一ヶ統へ全力を集中すべきだつたんだ！」

せいせい息を喘がせて、崖道を登りながらの問答であつた。清六の顔は、今日も穩やかであつたが、その釣り上つた眉宇は珍らしく曇り、沈痛なものが、秘められてゐた。登り切ると、番屋や倉庫よりも、まつさきに清六の眼に入つたのは、郡司大尉の漁舎であつた。——居候のビリチフも、今では漁夫同様に番屋で寝起きしてゐるので、郡司大尉の漁舎は、元通り無人のままに保管されてゐるのであつた。」

清六は、その破れた下見板の前まで歩み寄ると、薄汚れた烏打帽を脱いで、大尉その人に對するやうな町重な一禮をした。

「ふん、オゼルナヤがこのざまちや、郡司さんもあんまり當にはならんべさ」

平塚は、例の吐き出すやうな調子で呟いた。清六の顔に、さツと翳が走つたが、しかし何も言はず、ぐつと唇をひきしめてゐた。

翌日、錦輝丸は、二百函の銀鮭罐詰と、少量の鹽鮭や鹽筋子を積み取つて函館へ出帆した。長い汽笛のひびきとともに、その抒情的な煙突のけむりが遙かな水平線に消え去ると、オゼルナヤの人々は、再び文化と——日本本土とのつながりを絶たれたやうな寂寥感に捉はれるのだつた。

清六は勿論、漁場に残つた。

彼はどうやら、このオゼルナヤを本陣として、今年度の不成績を、一舉に挽回すべく肚をきめたに相違なかつた。

しかし、人力ではどうすることもできない自然の動きであつた。神は偉大な作者であり、人間はただその演出者に過ぎない——誰かのこの有名な言葉を、清六は、今更ながらしみじみと想ひ出すのであつた。

232 號には、數回、僅かな漁模様があつた。しかしそれは孰れも、漁夫の言葉で「ケラがかり」といふほどの薄漁だつた。半日ばかり濱が賑やかになり、工場の煙突に線香ほどの煙が立つたかと思ふと、もうお終ひであつた。依然として紅鮭は姿を見せなかつた。

ウス・カムならば凍原フシロの上が青みがかつて、可憐な高山植物の花々が、撩亂たる自然の花園を現出する頃である。だが、ここでは、すべてがまだ冬のただすまらであつた。クルチューフスカヤのやうな高峯は見られなかつたが、峨々と連なつた山々は氷を刻んだやうに白く峻しかつた。ウス・カムの海霧ガスの代りに、ここでは日に一二回、必らず雪まじりの烈風が吹いた。オホーツク海は、寒流性の緑色を深めて、じつと静

まり返り、時々鮫の齒を並べたやうに白波を立てて暴れた。

益々憤りつぽくなり、漁夫たちを震へあがらせてゐる平塚とは反對に、清六は、自棄くそではないかと思はせるほど樂天的だつた。果報は寢て待て式に、番屋の鐵板ストロブの前に體を投げ出し、講談本を讀んだり、得意の駄洒落をとばしたりしてゐた。——彼は、崖下の罐詰工場から、崖上の食堂に通ふ電光型の坂道を「風船坂」と名づけた。

「風船坂？ 何のこつた？」

高橋が、首を傾げて訊くと、

「みんな、食ふ氣（空氣）で登つてくるからだこて！」

清六は得意さうに説明して、ひとりで腹を抱へて突ひこけるのだつた。

七月も近づいたある朝のことであつた。珍らしく鮮やかな朝日の影を長々と崖裾に曳きながら、清六と平塚は、磯傳ひにオゼルナヤ河の方へ歩き出してゐた。二人は、

時々立止つて何か言ひ合つてゐた。平塚の濁み聲と、清六の疍高い聲がもつれ合つた。

「おらア、どうしても切揚げの考へだ。これ以上、無駄飯は咽喉さ通らん！」

平塚が、唇をわなわな顫はせて言つた。

「待て！ 切角こんだけの設備をして勿體ないこと。もう少し待て！」

清六も、高飛軍に、抑へつけるやうに言つた。

「だから切揚げると言ふんだ！ この設備、毎日の食費、人件費、燃料費が勿體ねえから切揚げると言ふんだ。ウス・カムさ合流すると言ふんだ！」

「意久地なし！ 郡司大尉に恥かしくないこんだか！」

「現に、一尾の紅鮭も獲れねえちやねえか！ おらたちは、貴様の駄洒落ば聴きたくて稼いでゐるんちやねえど！」

「何ッ……」

二人にとつては、ウス・カム初年度のアルコール問題以來の直剣な論争だつた。――

だが、今年は、清六が、言ひ負かされたやうに聲を詰らせてしまつた。

しかし清六は、議論に負けたのではなかつた。彼の眼前に――崖裾の向ふに、清らかな水を湛へたせんかんたるオゼルナヤ河の流れが打ち開けたとき、清六は、不思議な靈感は衝たれたやうにはッと立ち竦んでしまつたのである。

「おい、この河！」

「河がどうした？」

平塚は、呆れたやうに清六の紅潮した横顔を見守つた。

オゼルナヤ河は、炭酸水のやうな見事な水泡を湧き立てながら、勢ひよく海へ注ぎ込んでゐた。その濕つばい河原に降り立つて、長靴の脛まで水に濡らしながら、清六は放心したやうに――そして何かを深く考へ込むやうに、原始林の緑の濃い遙かな上流を眺めやつてゐた。」

道は拓け行く

一

オゼルナヤ河は、流域約三十里、カムチャッカ半島の横皺の一本として、殆ど直線的に溪谷を縫ひ、海に注いでゐる。

地図で見ると、その水源は、オゼル湖といふ周圍五里ばかりの小湖である。

「どうだ。この湖まで行つてみんか？」

ある日、清六が、ストーブの傍で平塚に言つた。

「何しに？」

「探險だ」

清六は、眞顔だつた。

「へッ、また病氣が出やがつたな」

二人の間に劇しい論争があつてから、三日ばかりしか経つてゐなかつた。それ以來笑つた顔も見せたことのない平塚だつた。

「このオゼルナヤ河へ、果して紅鮭が遡るかどうか、調べてみたいがんだ。——その結果によつて、232號の價值がきまる。もしこの河へ紅鮭が遡らんやうだつたら、おら、貴様の意見通り、深く、切揚げを斷行する」

「ふん、調べてみるまでもねえことだ！」

平塚は、そつぽを向いたまま言ひ放つと、席を蹴つて番屋を出て行つた。戶外は今日もひつそりしてゐた。半開きになつた板戸から、寒い風が吹き込んできた。

清六は、小半日も地圖を睨んでゐた。

夕方になると、高橋榮吉を呼んで、何かひそひそ話しはじめた。

翌日早く、カムチャダールのピリチフ老人が清六と高橋の前に呼ばれた。

この老人は、相變らず獸皮の上着をつけ、枯草のやうな薄い髪と、眼の存在の判らないやうな皺深い顔を持つてゐたが、二ヶ月以上の番屋生活で、漁夫同様米の飯を食つたせいも、色艶はよほど人間らしくなつてゐた。それに日本の言葉も多少は話せるやうになつてゐた。ただ判らないのは自分の年齢であつた。しかし清六や高橋の眼から見ると、どうしても七十より若いとは思へなかつた。

オゼルナヤ河を遡航する計畫を聞かされると、ビリチフの顔色がちよつと變つた。若いとき一度遡つたことがあるが、鮭が棲むかどうか忘れたといふ挨拶だつた。その話し振りでは、どうやらオゼルナヤ河は、神聖な河として、濫りに舟を乗り入れない場所としてあるらしかつた。

しかし結局、ビリチフ以外に適當な案内人はなかつた。

親方が河を探險する——といふ噂は、その日のうちに漁場中に擴がつた。話題に涸渴してゐた彼等にとつて絶好の事件^{トピック}だつた。子供つばい眞似を……と苦り切る漁夫も

ゐたし、勇ましいことだ、と自分も行きたいやうな顔をする船員もゐた。

平塚、増野、菅宮などの幹部連は、いづれも不賛成だつた。物好き、向ふ見ず、憂さばらしの舟遊び——そんな言葉が、燒酎のコップを廻す彼等の口から洩れた。「日和あげ」だと言つて、さんざ飲み騒いだ彼等が、まだ泥のやうに睡つてゐる翌日の午前五時、清六と高橋は、ビリチフを伴つて「風船坂」を下つて行つた。

河の遡航には、底の浅い原住民の獨木舟^{カヌー}が何よりも適當に思はれたが、ここではそれを手に入れることは出来なかつた。寶壽丸の傳馬船のうちでも、いちばん輕捷で、細長い形をした一隻が使用されることになつた。清六の愛用船で、その舳の舷側には赤ペンキで「彌彦丸」と書かれてあつた。もちろん、郷里越後の名山の名をとつて命名したものであつた。

小型天幕、毛布、ロープ、地圖、磁石、米二斗、味噌若干、梅干一樽、鯛十把、藥品等々——が、「丸」と名づけるにはあまりに小柄な、長さ二間、幅三尺の彌彦丸に

積み込まれた。

いざ出発といふとき、高橋は、

「忘れ物だ！」

と叫んで渚へとびあがつた。そして、すぐ、手に一挺の獵銃をさげて引つ返してき
た。

朝霧が、崖壁から、海の上からむくむくと湧き出してきて視野は狭かつた。崖の上
の番屋がほんの微かにしか見えなかつた。高橋が両手に車轡を握り、ピリチフが舳で
清六が舳で、張竿を岩礁に突き立てて少しづつ舟を進めた。

磯傳ひに數丁——オゼルナヤ河の河口まで来た。約十間の幅で、海岸線と直角に、
清水が奔り出てゐた。そのあたり一帯、海の色が變つてゐるほど、川幅の狭いに似合
はぬ夥しい清水の量であつた。

高橋は齒齧みをした。全身の力で漕ぐ車轡が、ギイギイ折れさうにさしつた。河口

を挟みつけるやうに、兩岸からせり出してゐる岩角へ、清六とピリチフは懸命に竿を
突き立てた。清六も高橋もびつしより汗だつた。ピリチフだけが顔色を變へなかつ
た。

河口は瀧にちかいほどの急流になつてゐるのだつた。三十里の水路を流れてきた勢
ひで、水は一氣に海へ迸り出てゐるのだつた。彌彦丸は流されては進み、進んでは流
され、漸く河口を突破した。若年から劍道で鍛へた高橋の鐵腕がなければ、舟は横流
れに轉覆したかもしれなかつた。

巾着の口をぐぐり抜けたやうに、殆ど倍になつた川幅が眼前に展けた。流勢も、同
じ川と思へないほど緩慢だつた。しかし兩岸は、河口同様、赤茶けた火山岩の聳え立
つた行列だつた。榛の木を主とした原始林が、その岩肌を覆ひかくすほど、鬱蒼と茂
りに茂つてゐた。灰色の空は、遙か頭上に、岩角で區切られた一本の線になつてつづ
いてゐた。

殆ど直線にちかい流域なのに、上流は、岩と原始林に挟められて針ほども見えなかつた。河をのぼるといふよりも、山峽を掻き分けて行く感じだつた。

彌彦丸は、ゆつくりと流れを裂いて進んだ。水は澄んでゐたが、蒼々とした深さで底は見えなかつた。時々、兩岸の林の中で、がさごそと獸の走るやうな氣配がした。鷺のやうな黒い鳥が、梢から飛び立ち、木の葉を降らせた。

ピリチフが奇聲を擧げて、危ふく竿を離さうとした。さつと水煙が立ち、狐ほどもある水獺かわうそが舟底を潜り抜けて見えなくなつたのだつた。上流の寒さを思はずやうに、間を隔いて氷のかけらが流れてきた。それは自然のまま水の中へ倒れかかつた大木の幹に當り、こーんと冴えた音を立てて、くるくる廻りながら流れ去つて行くのだつた。

清六の注意深い眼は、絶えず兩岸に配られてゐた。——部落がないか、人家がないか、少しでも人間の棲んでゐさうな形跡はないか、それを捜してゐるのであつた。も

し沿岸に部落でもあれば、この河に鮭がのぼることを證據立てるわけであつた。しかし、民家は愚か、杭一本ほども人工を加へた跡はなかつた。

小半日も遡航をつづけ、持參の握り飯で晝食を済ますと、最初の緊張から解き放たれたやうなゆつたりした氣持になつた。流れはますます緩やかだつたし、空は僅かな青みさへ見せてきた。清六と高橋は櫂を代り合つて漕ぎながら、郷里の五十嵐川の想ひ出を語つた。

「今年も河原ぢや、花火が豪儀なこんだらう」

「ほんに。おらなんだか、粽ちまきが食ひとなつたこて。はッはは」

振武館道場の少年時代から、奇しくも結ばれた二人の友情である——高橋はそれを思ひながら、清六に櫂をまかせたまま、舳を枕にうとうと睡たくなつて行つた。

五十嵐川の白い流れ。

古風な三條の雁木の町通り。

水音に眼ざめてハッと我に返り、ここが、故郷とはあまりに離れた北緯五十三度のオゼルナヤ河と気がつき、ぞつとするやうな寂寥と戦慄に襲はれるのであつた。

川幅はしだいに狭くなつてきた。木蔭が黒ずんで、一層深く水中へ垂れ下つてきた。しかし水深はやや淺くなつた。白い石の光る水底には、枯木が骸骨のやうに沈んでゐた。思ひがけなく、左岸に一ヶ所、岩の間が廣くなり、搔きならしたやうに河原になつてゐる場所があつた。絶好の宿营地だつた。まだ日は高かつたが、清六はそこへ舟を寄せた。

天幕が張られた。枯枝をあつめて焚く炊事の煙がゆらゆらと形を變へながら、岩角をかすめ、樹木を縫ひ、無氣味なほどまつすぐ空へ這ひ上つて行つた。

明るいうちは三人とも朗らかだつた。山遊びに來たやうな氣樂さで、さかんに笑聲も谷間に反響した。——だが、とつぷりと暮れ果てると、うるしのやうな暗さが三人をしめつけてきた。川音が緩く微かなのも凄く聞えた。高橋はまつ先に、毛布を額ま

でかぶつて寝てしまつた。

ちらちらと天幕の壁にうつる蠟燭の灯をみつめながら、清六は睡れなかつた。——本當にこれでは遊山のやうな氣樂さではないか。要するに、今日の溯行は無收穫なのだ。一尾の魚も見られなかつたではないか。

(絶望?)

平塚の鋭い顔が、眼の前に迫つたり離れたりした。そしていつか、寢苦しい夢の中へひき込まれて行つた。

二

起き抜けに、二人は、聲を立てて笑ひ合つた。清六の顔にも、高橋の顔にも、太い蚯蚓腫れができてゐた。手足が無性に痒かつた。正體は判らなかつたが、とにかく猛烈な毒蟲にやられたに相違なかつた。ピリチフだけが一向平氣だつた。彼のトタンの

やうな頑丈な皮膚には、毒蟲も、おそれをなして寄りつかなくなつたのかもしれないなかつた。

彌彦丸は、第二日の溯行を開始した。

兩岸の岩は低くなり、水は益々淺くなつてきた。舟底がこすりつけられるやうな音がすると、ピリチフは奇聲をあげて、川の中へとび込んでしまつた。

「よしッ、曳き船だ！」

積んできたロープが役立つときがきた。清六とピリチフが右岸に、高橋が左岸に別れ、舳に結びつけたロープを曳いた。雑草や、刺のある茨が、鐵條網のやうに顔と手をひつかき、足は砂礫や苔のある岩を踏みつけてズルズル滑つた。彌彦丸は張子の虎のやうに、右へ左へ頭を振り立ててのぼつて行つた。

「えーいこーら、えーいこーら……」

清六は、毒蟲と茨の被害で、血だらけになつた顔を強引に微笑ませて、ヴォルガの

船唄の曲調で掛聲をかけた。

気温は益々低下し、細かい氷片をちりばめたやうな濃霧が、山峽から襲ひかかつてきた。しかし、このはげしい労働に従事してゐる三人には、寒いとも感じられなかつた。

かうして第二日が暮れた。

昨日より居心地の悪い狭い岩の間に天幕が張られた。

結局、今日も無收穫だつた。得たものは、顔や手足の傷の痛みと、綿のやうな疲労だけだつた。その代り、夜は、反省も悩みもなくぐつすり睡ることができた。

第三日。

昨日の名残りのやうな霧が、薄く川面にたゆたつてゐた。風のない平凡な夜明けだつた。清六も高橋も、清冽な水で含嗽をしながら、この日が、堤商會にとつても、自分たちにとつても、記念すべき日になるとは想像さへしなかつた。

彌彦丸は出發した。

湖が近くなつた——といふ意味のことをいひ、ピリチフはしきりに脅へた眼つきをした。甚だ頼りにならない案内人だつた。

二日間に流域の三分の二を遡行したことは確かだつた。あと十里足らずで目的の水
源——オーゼル湖へ達する筈であつた。

氣まぐれなオゼルナヤ河は、ここではまた水深をふかめ、もう曳き船の必要はなかつた。車權は、高橋の腕の一部になつたやうに滑らかに動いた。——凡そ二時間も溯航した頃、ピリチフが、妙な聲をあげて水中を指さした。清六は、舳から半身を乗り出して水底を眺め、瞬間、思はずハッと息を呑んだ。

果々たる白骨の行列である。

魚だ！ 一眼で、鮭とわかる魚骨だつた。

紅鮭か銀鮭か——とにかくそれらしきものが、標本のやうな見事な白骨となつて、

水底に青白く輝きながら、敷き並べたやうに折り重なつてゐるのだ。

清六と高橋は、顔を見合せて吐息をした。アフリカで、象の墓場を發見した探險家よりもつと眞剣な表情だつた。

この鮭の白骨は何を意味するか？

鮭はなせここで死骸となつたのか？

突嗟にその回答はでてこなかつた。

白骨の行列は、點々としてなほ上流までつづいてゐた。舟の進行が起す波に、ゆらゆらと生きてゐるやうに揺れて無氣味だつた。

だが——間もなく、それよりも彼等を驚かす事件が突發した。

がさツと右岸の叢の鳴り騒ぐ音に、ぎくりと振り返つた清六の眼が、そのまま膠着したやうに動かなくなつた。高橋の櫂を漕ぐ手が、ひとりでに止つた。

岸から十間ばかりの高さ——そこに、巨人の拳のやうに張り出した岩盤の上に、赤

黒くのそのそと動くものが見えたのである。

(熊だ！)

さつと、冷たいものが、心臓へちかに觸れた感じだつた。黄色つぼく輝く二つの眸が、たしかに、彌彦丸へ据えられてゐるのだ。

「あッ！」

氣丈な高橋までが、悲鳴に似た聲を放つた。

豫期してゐたものが、遂に現はれたといふ感じだつた。六尺ちかくもありさうな巨熊は、人間の抵抗の準備を封じるやうな迅速さで、音もなく岩角から河岸へと這ひ下りてきたのだ。

高橋の両手が慄ただしくがさこそと舟底を搜した。天幕と毛布の下から、獵銃がひき出された。萬一の要心が役立つたのだ。しかし、河岸へ向けて狙ひを定めた高橋の顔は、電流を受けたやうにこわ張つてゐたし、せいせいと苦しげな呼吸が清六の耳に

聴へてきた。

だーん！

硝煙があがつた。

熊は跳躍した。命中しなかつたのだ。いや、ぐらりと微かに傾いたのは、どこかに掠り傷を受けたに相違なかつた。立ち直ると、憤怒を爆發させたやうに、三人へ向つて大きく咆哮した。こだまを返す物凄じい聲だつた。前肢が河原の石を踏みつけて進みかけてゐた。三人は突嗟に、水際と彌彦丸の間の短かい距離を目測した。この巨熊ならば、一泳ぎに泳ぎつける狭さなのだ。

そのときだつた。鱸のはづれに、忘れられたやうに蹲つてゐたピリチフの體が、弾むやうにつと伸びた。無言で横合から猿臂をのばして高橋の銃を奪つたのと、銃把を肩先に當てて構へたのと殆ど同時だつた。

だーん！

熊は再び跳躍した。鮮やかな月の輪が閃いた。どさりと凄まじい地響きがしたと思ふと、巨熊はそのまゝ動かなくなつた。半身が——二本の前肢が流れにつきり、その流れが見る見る糸を曳くやうな赤さに染まつた。

三人は、ほ—つと長い息を吐いた。信じられないやうに清六と高橋は顔を見合せた。

「ピリチフ！ 貴様、大した腕だなア」

高橋に肩を叩かれて、ピリチフは微かに笑つた。その木乃伊ミイラのやうな皺の底に曇まされた眼が、素晴らしい視力の持主であることが判つたのだ。獵師として本領を發揮したのだ。

だが——この勇ましい獵師は、舟が上流に進むにつれ元氣がなくなつてきた。兩岸の岩が刎ねのけたやうに廣くなり、冷たい水氣を帯びた風が吹き出し、そして遂に、盆のやうな碧い水が見え出すと、彼はもう竿を押す手もやめて、ガタガタ齒の根を鳴

らしはじめたのである。

オーゼル湖だ！

途中の峽谷よりも、更に鬱蒼として、まるで盛り上つた緑の噴煙のやうな原始林だつた。それに囲まれたこの小さな火山湖は、青黒く静かに、鑽石のやうに動かなかつた。

ピリチフが、突然、泣き喚くやうに叫び出した。歸らうと言つてゐるのだ。引つ返さうと嘆願してゐるのだ。——昔、オゼルナヤ河畔の先住土民がコサツク兵の掠奪に遭ひ、逃げ場を失つて一族全部がこの湖中へ身を投じたといふ傳説がある。ピリチフは、それを信じてゐるのだ。この湖の神祕を冒せば怖い崇りがあると信じてゐるのだ。

車權は寒天のやうに滑らかな水を切つて湖中へ滑り込んだ。この湖にとつて最初の謎のやうな静かな謎が、音もなく湖心へ傳はつて行つた。清六の耳にも、高橋の耳に

もピリチフの嘆願の聲は聞こえなかつた。二人とも、落ち込みさうなほど體を舷縁から乗り出して、水中を凝視してゐたのだ。

底知れぬ青い水を透して、金魚か緋鯉かと思はれる數尾の魚が、朱を撒いたやうに泳ぎ廻つてゐた。

「紅鮭だ！」

清六も高橋も、同時に叫んでゐた。

ピリチフは、愈々恐怖の底へ押し詰められたやうに、顎をがくがくさせた。彼の眼にはこの紅鮭の群も、コサック兵に追ひ込まれた先住土民の魂の化身と見えなかつた。

彌彦丸は、オゼルナヤ河への落口へと舳を戻した。最初は氣付かなかつたが、そこには、實に夥しい目高のやうな小さな魚が、蚊柱を立てたやうに纏れ合ひ圓まり合ひながら、雪溶けの水に乗せられて少しづつ河へ流れ出て行くのだつた。

「これは！」

高橋は眼をまるくした。

「紅鮭の仔だ！ 紅鮭の仔に違ひねえこんだ！」

清六は、確信の眼を輝かせて、舷縁を叩きつけるやうに叫んだ。その物音に驚き、サツと蜘蛛の子を散らすやうに魚群が亂れた。

「これは一體……」

高橋は、想像もつかぬ自然の謎に壓倒される形で、清六の顔と、水の上とを半々に見較べながら呟いた。

「これで判つた……」

清六の面上には、言ひ知れぬ感動が閃めいてゐた。彼はいま、その眼で、紅鮭の習性を、はつきりと知ることができたのである。

——紅鮭は、海中を泳いでゐるときは、背は蒼綠色で肉は鮮やかな紅であるが、産

卵期に河を溯ると、魚體一面もまた火を吹くやうに紅くなり、頭部がオリーブ色に變るのである。そして、紅鮭は湖の周邊で産卵を遂げると、海へ歸る途中の河の中で、一生の義務を仕遂げた安心と、産卵に全精力を傾けた過勞のために斃死する。いはば子孫の犠牲となつて死んで行くのである。——遡行の途中で見たあの累々たる白骨はその死骸だつたのだ。

そして、湖で生れた稚魚は一と冬をそこに過し、春、解氷とともに海へ下るのである。現に今、オゼルナヤ河の落口から、少しづつ流れ下つてゐるのである。そして、既に七月の今頃になつて、稚魚の河への旅が初められたといふことは、今年が如何に季候が寒く、漁期が遅れてゐるかを物語つてゐるのだ。

「おい、高橋！ この稚魚が残らず河を下つて海へ出る頃、それと入れ違ひに卵をいづばい孕んだ親の紅鮭が、きつと河も埋まるほど押し溯つて來るこんだぞ！」

清六は、顔を輝かせ、聲を顛はせて言ひ、湖心近くに泳いでゐる緋鯉のやうな紅鮭

の一群を指さした。

「あれが、その先馳けだ！」

彼の冴高い聲は、四圍の靜寂を破つて澄み切つた碧潭にこだまを返した。

「すると……」

高橋は、まだ半信半疑に顔を傾けながら、

「オゼルナヤの漁場は……232號は……」

「うん、有望だ！ 有望だとも！」

清六は、太鼓判を押すやうに強く言ひ切つた。

稚魚の群は、新しい今年の親魚を誘ふやうに、清らかな雪溶け水に乗つて、靜かに河へ流れ出てゐた。

今は、ビリチフも、恐怖を捨て去つたやうに、無言で青い水を瞞めてゐた。

オーゼル湖を圍む舊火山の群は、千古の雪を頂いてひたすらに崇高であつた。

この大自然に禱りたいやうな、感謝と喜びが、ひたひたと清六の胸に溢れてきた。

三

清六たち三人は、八日ぶりでオゼルナヤの漁場へ歸つてきた。

まづ、清六の眼を驚かせたものは、寶壽丸が、舷側に舳を横着けにして、荷役を開始してゐることだつた。

彌彦丸は、オゼルナヤの河口からまづすぐに寶壽丸へ向つて急行した。舳の上では平塚が、積込みの指揮を執つてゐた。

「待て！ おい待たんか！」

一眼でそれは、漁場の切揚げ準備とわかるのだつた。清六は、平塚の決意が豫想外の頑強さであることに驚きながら、叫んだ。

平塚の鋭い眼が、舳の上から、キラリと海上の清六に向けられた。——ふん、歸つ

てきたな、といふ顔付きだつた。

舷縁をぎーツと軋らせて、彌彦丸が舳に横着けになつたのと、清六が、それに積まれた空罐函の上へとびあがつたのと同時だつた。

「平塚！ 貴様……」

八日間の探險で、垢と髭と掠り傷に蔽はれた清六の顔が、常にない壓力を以て平塚に迫つた。

「どうあつても、切揚げるといふのか？」

「知れたことだ！」

吐き捨てるやうに一言、平塚は答へた。

「待て、待つてくれ。必らず魚は来る！ 俺は河の探險で……オゼル湖を調べてみて確信したこんだ！」

「おらには信じられん！」

「信じられんでも待つのだ！　ここで、このまま切揚げては、世間の冷笑を買ふばかりだ。デンビイの思ふ壺に飲るばかりだぞ！」

「……構はん！」

口を歪めて一蹴した平塚の赭顔が、次の瞬間、びしッと烈しい音を立てたのである。

「あッ！」

寶壽丸の甲板にゐた増野船長も、船員たちも、舢舨の中の漁夫たちも眼を瞠つた。

平塚は、頬を仰へてよろよろとなると、足場を踏み外し、漁網の積み込まれた船底へ、どさりと倒れるやうに落ち込んだのである。

「……………」

清六は、親友を、義弟を殴つたのが自分の手であることを信じられぬやうに——呆然と、斷崖から吹き下す風に伸びた頭髮をなびかせながら、そこに立ち竦んでゐた。

やがてその頬に、光るものが糸を曳いて流れた。

平塚は、船底から起き上つた。

その眼も濡れて光つてゐた。破局の悲しみか、清六の固い決意への感動か、それは判らなかつた。

「やめだ！」

彼は、呻くやうに言ひ、漁夫たちに命じて、舢舨を陸へ漕ぎ戻らせた。

再び沖合に網が据えられ、清六の確信に満ちた指揮に依つて、漁場は漁場らしい雰圍氣をとり戻して行つた。

天候は依然落着かなかつた。朝夕の冷たい海霧が、この斷崖の村への唯一の訪客だつた。漁夫たちは、次第に憂鬱と郷愁の中へ塗りこめられ、牛のやうに無口になつて行つた。

だが——

すべての人間の、小やかな感情をふきとばすやうな、素晴らしい日が遂に訪れた。その朝——數知れの鷗の群が、雪片を撒いたやうに沖へ現はれたと思ふと、忽ち、オゼルナヤの河口へ向つて殺倒した。

海の色も、河の色も變つてゐた。

一筋の帯のやうに、河口へ押し寄せた魚の群は、數刻後には、海岸一ばいに、海上一ばいに擴がり溢れて行つた。

「群來だどう！」

「魚が來たどう！」

漁夫たちの叫びが八方に亂れ飛んだ。番屋にも倉庫にも、「風船坂」にも、そして罐詰工場にも走り廻る漁夫や雜夫たちの姿が殖えて行つた。

やがて、工場の煙突から、煙がのぼりはじめた。空罐が、夥しく工場へ搬び込まれた。

起し船は、屈強の漁夫たちを乗せて、ざんぶと波を蹴立て、232號の建場へ向つた。その建場から、勇壯な木遣り聲が聞えはじめたのは、それから待つ間もない後であつた。清六の耳には、ウス・カムの漁場で聞いた木遣聲よりも、十倍も胸にしみて聽へる木遣聲だつた。彼は、何べんか渚の石に蹴つまづきながら、波打際へ走り寄つた。

魚の群は、そこにまで群來てゐるのだ。同族に押し捲られるやうに、弧を描いて刎ね上つてくるその一尾を、清六はしつかと兩手に受け止めた。

「紅鮭だ！」

疑ひもなく紅鮭だつた。指で押せば、たらたらと流れ出るほど卵を孕んだ、爛熟し切つた紅鮭だつた。

「うん、紅鮭だ！」

その聲に、清六は振り返つた。

五間と離れてゐない渚の一角で、平塚が、清六と同じやうに、紅鮭を両手に掴み上げてゐたのだ。

「堤……おらの負けだ！」

平塚は、少年のやうな含辱み笑ひをうかべながら、清六の方へ歩み寄つてきた。

「間違つてゐた。清六、おらは間違つてゐたんだ。さ、おらを毆つてけれ、いくらでも氣の済むまで毆つてけれ！」

「ははは、何を言ふがだ！ こりや、みんな、自然の氣紛れだこんだ……」

清六は、手にしてゐた鮭を、ヤツと氣合をかけて、海へ抛つた。鮭は、くるくると回轉して、水煙とともに磯波の上へ落ち、そこに轟めいてゐる同族の中へ吸はれてしまつた。

堰を切つた魚の群であつた。

ただこの一瞬を待ち構へてゐたやうに、潮のやうに海底から盛りあがつてくる魚の

群だつた。その總てが、オゼルナヤ河へ遡行するには、あまりに夥しい量だつた。殆ど大半は、河口に達するまでに、沖合に張りめぐらされた232號の網にかかつた。餓へた鴨カモのために、中天へ攫はれて行くものもあつた。上風ぎに凧ぎ渡つたオホーツク海は、この時ならぬ魚の波に、搖れ、ざわめき、泡立つてゐるのであつた。

その壯觀を、塑像のやうに眺めてゐた平塚が、突然、崩れるやうに膝を曲げたかと思ふと、渚の岩へ片手を突いて、くっくっくっくと肺腑をしぼるやうな嗚咽をはじめた。

太陽は、山上にのぼつてゐた。

雲間を破つたその夏らしい陽光が、海を彩り、崖の上の郡司大尉の漁舎を照らした。

この見る影もなく破れた小さな漁舎が、屋根も、壁板も黄金色に輝くとき、それはまるで、大理石で壘みあげた記念碑のやうに美しく神々しく見えるのだつた。

清六は、渚に足を濡らしたまま、瞬きもせず崖の上を仰いでゐた。

— 完 —

(附記)

この年以來、「堤商會」の業績は、益々順調の一路を辿つた。

翌年から漁區は東海岸にも西海岸にも擴張され、精巧な自動罐詰製造機械が購入されるに及び、「堤商會」の製造高は斯界を壓倒し、その製品——「曙光印罐詰」は世界市場に雄飛した。

宿敵アルフレッド・デンビイは、漸次不振に陥り、大正六年、遂にカムチャツカの漁場から旗を捲いて没落した。

大正十年三月十三日、「堤商會」は輸出食品株式会社その他を合併して「日魯漁業株式会社」を創立した。後には、資本金五千餘萬圓の日本一の大漁業會社に發展

した。

取締役會長堤清六、常務取締役平塚常次郎の名は、漁業王として海外にまで響いた。

この頃より、清六は次第に政界へも驥足をのばし、「代議士堤清六」活躍の時代となる。

昭和六年九月十二日。

函館海岸の海水浴場で得た不慮の負傷が禍ひをなし、堤清六は忽然として逝つた。享年五十二。時に「日魯漁業」の全盛期であつた。

淨雲院清譽慈海蒼龍居士。

たとひ肉體は滅したとはいへ、彼の靈魂は、氣魄は、日本の水産業を世界第一位に押し上げた彼の闘志と努力は、とこしへに北洋の荒波に生きてゐる。

出版會承認
350189



昭和十九年三月十日印刷
昭和十九年三月十日發行

五、〇〇〇部

日本出版會々員番號 131011

北海の征服者

◎定價金二圓二十錢
特別行爲稅相當額金八錢
合計金二圓二十八錢
送料・十五錢

著者 カハバマ 克二

印刷者 東京都神田區鎌倉町一ノ六 川瀬 壬子

發行者 東京都神田區三崎町二ノ三 牧 重治

發行所 東京都神田區三崎町二ノ三 牧書房

電話九段(33)三九〇三番
振替東京一五八九二七番

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

984
121

終



賣價(税込)¥2.28